

# 別子銅山産業遺産創造塾

堀内洋助  
ふるさと20景

## 郷土愛を育み次世代へ



ほりうち・ようすけ 1954年松山市生まれ。元東京新聞写真部記者。「渡良瀬有情」「富士異影」取材班で新聞協会賞受賞。著書に「再生の原風景」「国鉄最後のSL」など。

【撮影データ】ニコンD850 AF-Sニッコール18〜35mm f/3.5〜4.5 絞りF11 500分の1秒 ISO400

8月上旬、新居浜市の別子銅山文化遺産課が主催する「別子銅山産業遺産創造塾」のフィールドワークに同行し、端出場（はでば）で、東平（とうへい）と名乗る。この地区を訪れた。新居浜南高校の13人が参加し、この歴史を学んだ。

目的だ。この夏、フィールドワークや講義などが5日間行われた。生徒に同行した新居浜南高の河野義隆教諭は「学校の設定科目にある『にはま』の一端で、市と連携して学んでいる」と話す。

東平地区では、れんが造りの貯鉱庫と運鉱場、索道基地の産業遺産が異彩を放っている。山奥に残る建物や石組みなどが南米ベルーの世界遺産

マチュピチュ遺跡に似ていることから、現在は「東洋のマチュピチュ」と呼ばれ親しまれている。新居浜観光ガイドの会の石川潔会長の講義に、生徒は耳を傾けた。

東平歴史資料館には、地元の写真家日和田初太郎氏（1917〜90年）が撮影した、銅山に暮らす人々の営みなどがパネル展示されていた。ふるとの歴史を伝える見事な作品に心が揺さぶられ、記録する写真の力を学んだ。

### 豊富な知識で案内



（左から）河野義隆さん、石川潔さん、津村亮さん、河中龍星さん



3日、端出場地区でスタートした「創造塾」。ここで新居浜南高生を案内したのは、元中学校長で別子銅山を研究する河野義隆さん（81）。父が銅山で働き、高校時代まで地区の山上にある社宅に住んだ。当時を知る貴重な証人だ。

「あそこは電車庫」「そこはガスマスク室」。穏やかな中にも熱量をこめた声で、当時の施設配置を伝えていく。施設に関する誤った俗説も流布する中、元住民として正しい情報を伝える責任を感じている。

「坑内ではたくさんの方が亡くなりました。私は第四通洞の前では、必ず手を合わせます」と。とりわけ重みのある河野さんの一言に、場はしんと静まった。

「マチュピチュ」こと東平地区を案内した「新居浜観光ガイドの会」の会長、石川潔さん（75）は昔、タクシー運転手だった。

50代のとき、客から銅山の質問をされて答えられず一念発起して勉強。そしてガイドの道へ進む。今は豊富な知識を備え、生徒への答えもどきみがない。「私は銅山を学び始めるのが遅かったですから、10代の時から学べる若い世代がうらやましいです」

旧端出場水力発電所では、市別子銅山文化遺産課の津村亮さん（45）が解説役。発電の仕組みや発電所が地域の産業にとりいかに貢献したかを話した。住友関連遺産の保存・活用を担う業務。周辺には、将来的な世界遺産登録を思い描く声もあるが「まずは愛着を持ってもらえよう」と足元を固めている。その一歩が「創造塾」だ。

（中井有人）